

第三十八回 杜預を薦めて老将新たな謀を献じ、孫皓を降して三分一統に帰す

— 三国統一 —

司馬昭が亡くなると、息子の司馬炎が後を継ぎます。彼は魏の禪讓を受けて皇帝の位につき、国号を晋と号します。こうして、魏は建安二十五年（二二〇）、四十五年で滅びます。

一方、呉では孫休が亡くなり、孫皓が皇帝になります。孫皓は孫権の孫で、廢太子孫和の息子です。彼は前評判は非常に高かったのですが、皇帝になると日ましに暴君ぶりを發揮します。酒色におぼれ、いさめる者があれば打ち首にし、氣にくわれない者の顔の皮をはいだり目をえぐり出したり、想像を絶する暴君となります。

その頃、国境では呉の名将陸抗が、同じく晋の名将羊祜と対峙していました。『三国志演義』は、二人の敵味方を超えた交流を描きます。

(本文抄)

ある日、羊祜が諸将を引き連れ狩獵に出かけたところ、たまたま、こちらも狩獵にやって来た陸抗と出会った。羊祜は「国境線を越えてはならない」と命令を下すと、命令を受けた

諸將は晋の領内で狩獵をつづけ、呉の領内には踏み込まなかった。

陸抗はそのようすを眺めながら、ため息をついて言った。

「羊將軍の軍には紀律がある。たやすく攻めることはできない」

かくして、日が暮れるとそれぞれ立ち去った。

羊祜は本陣に帰り着くと、その日の獲物を点検し、先に呉の將兵が射止めていた獲物については、すべて呉に送り届けた。呉の將兵が喜んで陸抗に報告したところ、陸抗は獲物を届けに来た使者を呼び入れ、たずねて言った。

「おまえのご主人は酒を飲まれるか」

「良い酒ならば、お飲みになります」と使者。

「私の手元に長年仕込んでおいた一斗いっとうの酒がある。ご苦労だが、持って帰って都督に差し上げてくれ。この酒は陸抗が自分で造り、自分で飲んでいるものだが、昨日、狩獵のさいに賜ったご厚情こうじょうのお礼にかえて差し上げたいと、お伝えしてくれ」と陸抗。

使者は承諾し、酒を持って立ち去った。左右の者が陸抗に、「將軍には酒を羊祜に贈られたのは、どのようなお考えからですか」とたずねると、陸抗は答えた。

「向こうが私に徳を施してくれた以上、私の方もお返しをしないわけにはいくまい」

配下一同は愕然としたのだった。

さて、使者はたちかえって羊祐に、陸抗に聞かれたことや酒をもらったことを、逐一報告した。

と、羊祐は笑いながら、「彼も私が酒を飲むのを知っていたのか」と言い、壺を開けさせて飲もうとしたので、部将の陳元が「なかに毒が仕込んであるかも知れませんから、しばらく飲まれるのは止めたほうがよろしいでしょう」と注意すると、羊祐は笑いながら、「陸抗は人を毒殺するような人間ではない。疑うにはおよばない」と言い、けっきよく壺を傾け、飲み尽くしてしまった。

これ以来、おたがいに使者をやりとりして、親しく往来するようになった。ある日、陸抗が使者をやつて時候の挨拶をさせたところ、羊祐はたずねた。

「陸將軍はお元気かな」

「病氣でお休みになり、この数日、お顔を出されません」と使者。

「それは、おそらく私と同じ病氣なのだろう。私が調合した薬がここにあるから、持つて帰つて飲んでもらつてくれ」と羊祐。

かくして、使者が薬を持ち帰り、陸抗に報告すると、諸將は「羊祐は敵でございます。こ

これは毒薬にきまっています」と言ったが、陸抗は「羊叔子(羊祜の字)は人を毒殺するような人間ではない。疑ってはならぬ」と言い、その薬を飲んだ。

翌日になると、病気はすっかりよくなったので、諸将はお祝いを述べた。

と、陸抗は言った。

「向こうが『徳』をもつてこちらに対してしているのに、こちらが『暴』をもつて応えたのでは、戦わずして敗れることになるだろう。今はそれぞれが境界を守ることにつとめるべきだ。些細な利益を求めてはならない」

### (解説)

このように、陸抗りくこうと羊祜ようこの間には敵味方を超えた友情がうまれます。陸抗が酒を贈れば、羊祜は疑うことなくそれを飲み、羊祜が病身の陸抗を案じて薬を届けると、毒入りではと心配する声に、陸抗は、羊祜はそのようなことをする人間ではない、とためらいなく服用します。こうした二人のつながりに支えられ、晋しんと呉の国境は、しばらく平和な状態が続きます。しかし、陸抗が亡くなると、羊祜は呉攻撃のチャンスが来たと判断しますが、それを果たさぬままに、後任に杜預とよを推薦して亡くなります。杜預は『春秋左氏伝』を愛読し、その注

積書である「春秋経伝集解」しゅんじゅうけいでんしゅうかいを著した学者でもありません。

このとき、益州えきしゅうの長官王濬おうしゅんが呉討伐を上奏します。羊祜は生前、呉の討伐を想定し、蜀に駐屯した王叡に水軍を強化するよう指示していたのです。

杜預とよもまた王濬とおなじく、呉を討つべしという意見でした。そこで、司馬炎しばえんは杜預を呉討伐の総司令官に任じ、王濬とともに水陸から呉に侵攻を命じます。

杜預とよがまたたくまに江陵かうりょうを攻めとると、武昌ぶしやうをはじめ長江中流域の呉の拠点が相次いで投降します。その知らせに驚いた孫皓そんこうに、宦官の岑昏しんこんが献策します。

#### (本文抄)

孫皓は後宮こうきゆうに入ったが、落ち着かず不安そうなようすだった。お気に入りの中常侍ちゆうじやうじ(宦官)の岑昏しんこんがどうなさったのかとたずねると、孫皓は言った。

「晋の軍勢が大挙して攻め寄せて来たので、諸方面にこれを迎え撃つ軍勢を出した。しかし、王濬おうしゅんが数万の軍勢を率いて、戦船をそろえ、長江を攻め下って来ており、その鋒先ほんせんははなはだ鋭い。朕ちんはそのために心配しているのだ」

「王濬の船団をこつばみじんにする計略があります」と岑昏。

孫皓は大いに喜び、その計略はどんなものかとたずねた。

と、岑昏しんこんが答えて言うには、「我がほうには鉄が大量にありますから、鉄の輪つなを繋いだ綱を百本余り作り、綱つなの長さは数百丈、輪の重さは一つにつき二、三十斤きんとし、これを長江の重要拠点に張り渡します。さらに長さ一丈余りの鉄の錐きりを数万個作り、これを水中に設置します。こうすれば、晋の戦船が追い風に乘つて来ても、この錐に引つ掛かかつて壊れ、こちらまでやつて来ることはできません」

孫皓は大いに喜び、国中の職人をかき集めて、夜を日について鉄の綱と鉄の錐を作らせ、とどこおりなく設置した。

(中略)

このとき、龍驤將軍りゅうじやうしやうぐんの王濬おうしゆんは水軍を率い、長江を攻め下つて来たが、前方せつこうの斥候から、「呉では鉄の綱を造り、長江に沿つて横に張り渡しております。また、鉄の錐を水中に設置し、戦いに備えております」という報告が入った。

王濬はからからと笑うと、数十個の大きな筏いかだを作り、その上に、鎧を着け杖を持たせた草の人形を並べ、流れに乗せて流させた。呉の兵士は、これを見て敵の来襲だと思ひ、筏が近づいて来ただけで逃げ出した。

また、鉄の錐はすべて筏に突き刺さり、筏とともに下流へ流れて行った。さらにまた、筏の上に長さ十余丈、十抱え以上もある大きな松明を束ねて、麻の油を注いでおき、鉄の綱にぶつかるたびに、この松明を燃やしたところ、綱はすべて焼き切れてばらばらになった。

#### (解説)

こうして岑昏の献策は何の役にもたたず、杜預と王濬は長江の流れに乗って攻め下ります。呉の丞相張悌は降伏を勧められますが、一人も国難に殉じるものがなければ、国の恥ではないかと言い放つと、力戦して戦死します。呉軍は散り散りになり、都の防衛線は崩壊します。

孫皓はいったんは自決しようとしませんが、側近から安樂公劉禪の例にならうようと言われ、王濬に投降します。

こうして、太康元年(二八〇)、三国時代は終焉をむかえます。降伏した孫皓は洛陽に送られ、晋の武帝司馬炎と対面します。『三国志演義』はこの時のエピソードを記します。

#### (本文)

でんじょう

孫皓は殿上でんじょうに上がると、平伏して司馬炎にお目通りした。司馬炎が座席を与えながら、「朕はこの席を用意して、長い間あなたを待つていたぞ」と言うと、孫皓は「臣も南方で、この座席を用意して陛下をお待ちしております」と答えたので、司馬炎は大笑いした。

また、賈充かじゅうが孫皓に向かつて、「聞いたところでは、あなたはいつも人の目を抉りえぐ、顔を皮を剥がれたそうですが、それはどんな刑罰けいばつにあたるのですか」と聞くと、孫皓は答えて言った。

「臣下の身分で主君を殺害したり、奸計かんけいをめぐらす不忠者に対して、この刑罰を加えたのです」

賈充は恥はじ入って、黙り込んでしまった。

司馬炎は孫皓を帰命侯きめいこうに、その子孫を中郎に封じ、随行して降伏した大臣たちをすべて列侯れつこうに封じた。丞相ちやうていの張悌ちやうていは陣没していたため、その子孫を列侯に封じたのだった。

これ（晋の太康元年。二八〇）以後、三国はすべて晋の皇帝司馬炎の手に帰し、天下は一つの王朝のもとに統一された。これぞいわゆる「天下の大勢は、統一が長ければ必ず分裂し、分裂が長ければ必ず統一される」ということなのである。

蜀の皇帝劉禪りゅうぜんは晋の泰始七年（二七一）に死去し、魏主曹奂そうかんは太安元年（三〇二）に死去



し、吳主孫皓は太康四年（二八三）に死去したが、三人とも平穩な最期を迎えたのだった。

（解説）

上記の本文抄は、孫皓の才氣煥發ぶりを描いて、まことに痛快です。特に、賈充の問いかけに、主君を殺害した者、奸計をめぐらす不忠者と賈充にあてこすった芸当は、彼が相当頭の切れる人物であったことをしめています。

ここで、賈充が恥じ入ったとあるのは、彼が高貴郷公曹髦を部下の成済に命じて殺させ、また魏最後の皇帝曹奐に強要して、帝位を司馬炎に禪譲させた張本人だったからです。

そんな才知ある孫皓が、目を覆うばかりの暴君に墮したのは誰しも不思議に思うところです。あまりにも先が見えすぎた孫皓の悲劇で、三国の一角の蜀はすでに滅び、いずれ直面する呉滅亡の重圧感に耐え切れなかったのでしょうか。

当初は孫策の再来と期待された孫皓でしたが、一転して三国時代きつての「暴君」となつてしまします。精神を病み、心奥からたちのぼる暗い影に自我が乗っ取られてしまい、自分の行動を自分の意志では制御できなくなつたのでしょうか。

『三国志』に引く注「江表伝」には、呉滅亡の直前、孫皓が舅父の何植に与えた書簡を載

せています。そこでは、呉の滅亡のすべての罪は自分にあると率直そつちよくに謝罪しています。また群臣ぐんしんにも、自分の愚かさで残酷な行為を謝罪し、新しい国でそれぞれの志を伸ばしてくれ、諸君の自愛じあいを祈ると書き送っています。

呉の滅亡が現実のものとなり、心の重圧から解放されたのでしようか、一転して、自分を見つめる冷静さを取りもどしています。

陳寿は、その評で厳しく彼を指弾します（『三国志』三嗣主伝さんししゆ、小南一郎訳、筑摩書房）。孫皓は度どしがたい悪人で、ほしいままに暴虐ぼうぎやくをはたらき、まごころをもって諫める者は誅殺ちゆうさつされ、腹黒いおべっか使いが拔擢ぼつてきされ、民衆たちを酷使し、淫乱奢侈いんらんしゃしをきわめたのである。当然、彼を斬首ざんしゆの刑に処して、すべての者に対して謝罪すべきであった。彼を許したのは、度を過ぎた寵沢ちゆうたくであったとしています。

こうしてついに呉も滅び、三国はことごとく消え去りました。董卓とうたくの乱以来約九十年、多くの英雄豪傑が縦横無尽じゆうおうむじんに活躍する時代は終わりました。

『三国志演義』は、その最後を第一回のはじまりと同じ、歴史の無常を見きわめた言葉で締めくくります。

これぞいわゆる「天下の大勢は、統一が長ければ必ず分裂し、分裂が長ければ必ず統一さ

れる」ということなのである。